

論文

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵

―連作『鹿児島新聞』の検討―

高橋 未来

キーワード

西南戦争 錦絵 新聞 士族反乱 西郷隆盛

はじめに

近世を通して美人画や名所絵を主な画題としていた錦絵は、明治に入り、初めて時事的な話題を描くことが公的に許されるようになった。明治一〇（一八七七）年二月に西南戦争が勃発すると、誕生したばかりの日刊新聞各紙は大きく発行部数を伸ばし、政府による報道管制の下に置かれながらも、従軍記者らが戦地から送る情報によって速報性・正確性の高い記事を連日掲載出来るようになる。そこに視覚的情報を補うものとして登場してきたのが、三枚続の錦

絵新聞の判型を受け継ぐ戦報錦絵であった。このとき東京において絵師として主に筆を執ったのは、月岡芳年、楊洲周延、永島孟齋らで、いずれも天保期に「はんじもの」で錦絵のジャーナリズム化の端緒を開いた、歌川国芳の弟子たちである。次第に新聞報道は講談や寺での説教、あるいは店先での音読など、音声による情報伝達で東京や大阪といった大都市のより広範な層に浸透していく。こうして錦絵の需要は拡大して、実に多様な形態・内容のものが刊行されることとなる。それら一群の出版物は「西南戦争錦絵」という名称で各地の機関に保存されており、筆者が全国九

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

カ所の所蔵館等で行った史料調査では、現時点で約六〇〇種の作品を確認している。

この「西南戦争錦絵」という呼称については注意が必要で、同時代の史料に用いられた言葉ではなく、定義が曖昧で研究者によって操作しうる概念である。筆者が確認した約六〇〇種の作品とは、明治一〇（一八七七）年～明治二六（一八九三）年までに刊行され、西南戦争関連の話題を取り上げているもの、西郷隆盛を描いているものを判型にかかわらず合計した数字であることを、あらかじめ断っておきたい。

これらの「西南戦争錦絵」は報道画とはいえない難いその荒唐無稽な内容から、浮世絵研究やメディア史研究の分野においてこれまであまり議論の対象とされてこなかった。歴史学の分野においても「西郷論」あるいは「西郷伝説」を語る文脈で、民衆の西郷への同情や肩入れを示すものとして用いられることが主である。しかし近年、画像史料を一次史料として用いる歴史研究は増えており、かわら版や幕末の時事諷刺画、明治初期の錦絵新聞等の全容解明が進む中で、それらを上回る数が現存する「西南戦争錦絵」を無視したまま近世近代移行期の社会・文化について語ることは難しくなってきた。そこには国民諸階層の、近世を通じて政治的支配を遂行した特権的身分であり、武力を独

占する社会的存在であり続けた士族たちに対する眼差し、そしてそうした士族層の役割を今まさに否定しようとする維新政権に対する眼差しが、何らかの形で表れているはずだからである。西南戦争によって誕生した新たなメディアの形態であり、東京市民に提供された娯楽でもあった「西南戦争錦絵」の同時代における位置づけを探るためには、この六〇〇種の出版物の類型化とともに個々の事例をつきあわせて検討することが必要となる。

「西南戦争錦絵」と版元・絵師・記者を同じくするメディアとして、明治七（一八七四）年の佐賀の乱を契機とする西国士族反乱の際に登場し、西南戦争期には一〇〇種近く不定期に刊行された冊子状の書籍類が存在するが、これらについては以下の三氏により実証研究が行われている。そのニュース・メディアとしての役割にいち早く着目した土屋礼子氏はこれらを「ニュース冊子」と呼び、新聞報道を整理して絵や地図などの視覚情報を補うことで人々の需要に応えた媒体という点を強調している。作り手は新聞関係者と戯作者系の文筆家に分類でき、西南戦争の際にはそれまでの「ニュース冊子」よりも大幅に視覚的表現が増強されたという分析は「西南戦争錦絵」の検討においても重要となる。また佐々木亨氏は、西郷隆盛への人々の関心の高さから戦報記事や錦絵及び冊子類は新たな大市場を開拓

し、新聞の連載記事が草双紙として単行本化されるという明治期草双紙の原型が西南戦争ものによつて生み出されたことを指摘している。佐々木氏と同じく文学史的観点からこれらの冊子及び錦絵を取り上げている生住昌大氏は、西南戦争期の出版界の動向に着目し、特に「実録」の形態や文体という視角からの分析を行っている。そしてその典拠を詳細に調査し、「実録」を標榜した冊子類も単なる新聞記事の引用でなく、作り手の政治的意図によつて改竄されていた可能性を提示した。また「西南戦争錦絵」についても同様の典拠調査で、絵師たちは新聞記事に基づいて想像力を働かせ、川中島合戦など過去の戦記類の枠組みに沿つて画を描いたことを明らかにしており、こうした西南戦争ものが明治一〇年代の異種百人一首ブームの呼び水になつたと考察する。本稿でも生住氏の設定した言葉を借り、これらの冊子を「実録」と呼ぶこととする。

本稿では諸氏の研究成果を踏まえつつ、膨大な錦絵の中でも特に『鎮撫 鹿兒島新聞』という大判三枚続の戦報錦絵シリーズ作品を取り上げ、その絵及び詞書の内容の典拠や時期的変化を明らかにする。戦報錦絵には詞書がないものが多い中、毎号同じ絵師と記者の制作によることが明らかで、通し番号などはないものの同一の表題を掲げて明らかに連作として制作された例は非常に珍しい。また政

府の征討令発令によつて初めて西郷隆盛が反乱の首領であることが明らかになる際、『鎮撫 鹿兒島新聞』は内容を大きく変化させている。「西南戦争錦絵」および同時代の「実録」研究において、特定の記者・絵師の組み合わせに着目し、彼らが錦絵に描いた内容の時期的変化を取り上げたものは、管見の限りこれまでに存在しない。この作品を検討することで、「西南戦争錦絵」作り手の意図や情報を取捨する過程の具体例を示し、「西南戦争錦絵」における事例研究の一つに加えることとしたい。

第一章 号外記事から錦絵へ

第一節 沼尻桂一郎と安達吟光

『鎮撫 鹿兒島新聞』は当時「真匠銀光」と号していた安達吟光による絵、そして「玄涯鐙」「太田鐙」「大多鐙」などの名前で文筆活動を行っていた沼尻桂一郎による詞書からなる。作画吟光・記者沼尻という組み合わせには他に、読本風の『西南太平記』（一〜一五篇）という「実録」がある。このうち沼尻については、西南戦争期にはこの二作品の他にもいくつかの作品を手掛けており、生住氏が「西南戦争の実録の享受と検閲―沼尻桂一郎作品を例として―」という論考の中で特に「実録」出版におけるその足跡

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

を辿っている。「東京府平民」^⑤もしくは「茨城県平民」^⑥であること以外素性は不明だが、この時期における最も活動的な文筆家の一人として重要な人物である。

対する安達吟光（本名安達平七）は嘉永六（一八五三）年生まれ、西南戦争が起きた明治一〇年当時は二四歳で、『鎮撫鹿兒島新聞』はその本格的な画業の初期にあたる。東京堀江町二丁目二番地に住居を構え、『西南太平記』を制作していた四く五月にはここに沼尻が止宿して、作品づくりだけでなく生活も共にしていた。前頁の【表1】は沼尻と吟光の明治一〇年の一年間における作品計六三点を内務省への出版届出の日付順に整理したのだが、ここに見えるとおり、当該時期の吟光作品はほぼ全て沼尻と組んで作られている^⑦。吟光の「依頼随真匠銀光画」という落款も考慮して、筆者は活動を主導していたのが記者の沼尻の方であったと想定している。

錦絵の画題選択においては通常、その制作・流通の全てを取り仕切る地本問屋（版元）の意向が強い影響力を持つとされる。しかし、『鎮撫鹿兒島新聞』はほぼ毎号版元を替えて刊行されており、そのことで絵や詞書の内容に変化が生じた様子はない。つまりこれは版元の意向を超えたところで、沼尻と吟光が独自に企画した作品なのである。

第二節 「鎮撫」する西郷

明治一〇年二月一日、鹿兒島で不平士族らが県庁を襲撃する事件が起きたとして、東京の大新聞各紙は号外を発行した。翌二日、この報道を受けて真っ先に出版が届け出られた錦絵こそ、沼尻・吟光の『鎮撫鹿兒島新聞』【図1】である^⑧。他の絵師達が二月一九日頃から戦報錦絵を描きはじめることと比較すると、彼らの反応は飛び抜けて早い。前年に相次いだ士族反乱の記憶も新しい中、彼らは鹿兒島士族たちの不穏な情勢を伝える報道に商機を見出したようである。

号外の段階では未だ、鹿兒島に隠遁している西郷隆盛の去就は明らかでない。表題の「鎮撫」とは図中に描かれる馬上の人物「鎮撫西郷隆盛」のことで、この時まで西郷には、鹿兒島の士族たちの動揺を「鎮撫」する役割が期待されていた。【図1】では左奥の「鹿兒島県庁」に士族・私学校生徒らが押しかける中、騎馬の西郷が「桐野某」（桐野利秋）ら血気にはやる士族たちを引き留めている。平服の士族らに対し西郷は直垂姿であることから、吟光がこの絵を描く際、明治政府の頭官としての西郷を強く意識していたことが読み取れる。

一日付の『東京日々新聞』（以下『東日』と記す）号外記事には、「鹿兒島県の私学校の生徒が二百人ばかり不

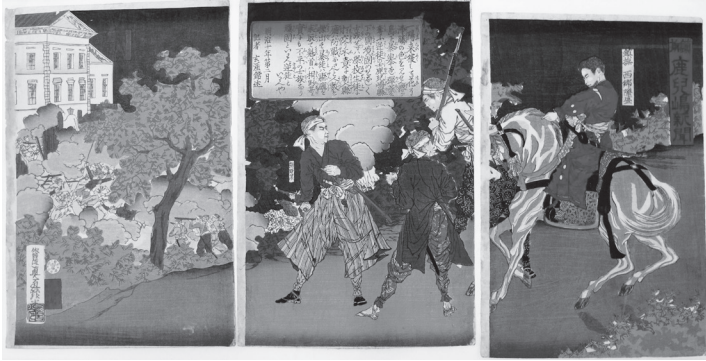


図1 『鎮撫鹿児嶋新聞』（明治大学博物館所蔵）

意に県庁へ押し寄せたりければ、宿直の官員ハ暫らくの間防ぎたれども、「中略」終に暴徒の為に乗り取られたりと云へども、是ハ全く附会の説ならんと思はる。」という表現が見られ、詞書もこの記事に基づいて書かれたものと判断できる。また西郷隆盛が土族らを「鎮撫」している点、土族らの代表が「桐野某」とされている点について、鹿児島の事件が世間に流伝せしより人々ハ西郷氏の進退に注意し、氏ハ此黨の魁首なるべきか、又ハ斯る無名の暴拳にハ組せられざりしかと想像するものも有れど〔中



図2 『鎮撫鹿児嶋新聞』（熊本市立熊本博物館所蔵）

略〕〔西郷が私学校生徒らに〕大義名分を説き論されしかども、壮年輩ハ毫も承伏せざれば跡を韜まし今にその行衛を知るもの無しと云ふ。〕「今度の党旨〔原文ママ〕ハ恐らくハ桐野なるべしと云ふ説あれども巷説なれば固より信じ難し。〕（一）内は筆者による）という翌二日付『東日』の雑報欄などの情報を取り入れたものだろう。いづれも、記事の文中に見られる「全く附会の説ならんと思はる」「固より信じ難し」など否定的な文言は詞書で取除かれている。〔図1〕と同じように詞書から『東日』号外記事との

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

関連が想定される錦絵は、管見の限り他にも二月一九日届『新聞鹿児島模写』（田村兵次郎版、月岡芳年画、記者不明）、同日届『九州陣立の図』（五月女勝五郎版、永島孟齋画、記者不明）、同日届『明治十年鹿児島暴徒等県庁へ乱入の図』（長谷川忠兵衛版、永島孟齋画、亀谷堂記）、二月二日届『鹿児島県私学校暴徒記』（版元不明、永島孟齋画、亀谷堂記）、三月一日届『鹿児島記事』（綱島亀吉版、桜齋房種画、記者不明）の五点が存在する。いずれも記事の表現をほぼそのまま引用しているが、画面にはただ無名の士族たちが県庁を襲う様子が描かれるのみである。対する【図1】では、詞書の中で新聞記事における否定・疑問の語句を削除して桐野利秋を首謀者とし、絵においてはその桐野をはじめとする士族らを西郷が説諭する。号外記事の情報から一步踏み込んで西郷隆盛という個人を主役に選んだ点に、沼尻と吟光の独自の工夫が発揮されているのである。

【図1】詞書
一陽来復して花に／沸騰の色を見せん櫻が／島に
暴舉なし弾薬を／奪ふ逆徒の土鹿兎嶋縣／下の國境
固めをなして／士族等ハ學校生徒に／打交り不意に
斬入縣／廳ハ防戦なさんと人數を／繰出す暴徒ハ
縣廳を／乗取て魁首ハ桐野某と／實にも不平の士族

なり／頑固といわん逆徒と／いわんや

明治十年第二月／記者 玄涯錦述

ところでこの鹿児島県庁襲撃事件は、実際には全くの誤報であった。この時現地鹿児島では私学校生徒らによる火薬庫・弾薬庫襲撃事件や西郷暗殺未遂事件が発生しており、その動揺が東京にも伝わったものと考えられるが、九州における戦闘はまだ始まっていない。号外記事においても「全く附会の説ならんと思はる」等の但し書きがされていたにも関わらず、この誤報はわずか一週間ほどの間に錦絵によって真実として拡散されていったのである。

号外の発行以降、情報量の少なさから新聞における鹿児島報道は落ち着き、『東日』は「我々が如き下界にハ鹿児島事ハ影も無く嗅も無きと云ふべき程の有様にとぞ成りにける、只々兵隊の発足。郵船の出發。又ハ官員名士がたの出張にて斯もあらんなど、当推量するのみ」（二月一七日付「雑報」欄）とその歯がゆさを伝えている。

そのような中、沼尻と吟光は二月一五日に『鎮撫鹿児島新聞』の二作目【図2】の発行を届け出ている。【図1】と同じく新聞記事から着想を得たものと思われるが、注目すべきは絵の中の西郷隆盛の立ち位置だ。画面中央では和装の「士族 桐野」（桐野利秋）と洋装の「内務少輔 林氏」（林友幸）がにらみ合っており、それぞれ刀・サーベルに手を

かけ一触即発の空気であるが、奥の「西郷隆盛」はただそれを垣根の向こうから見守るのみである。士族らと官員らが対峙するだけで作品としては十分に成り立つにも関わらず、わざわざこうした形で西郷を描き入れているのは、消費者の彼に対する関心の高さを見込んだ戦略だろう。そしてどちらともつかないその立ち位置の曖昧さは、鹿児島で起きている事態について号外以降の続報が得られない、沼尻と吟光の状況を反映しているのである。先述したように『東日』記者は、兵隊の発足、郵船の出発などの断片的な情報から鹿児島で起きている事態について「当推量」するしかないと思案をこぼしており、日刊新聞が唯一の情報源であった錦絵製作者たちにとってもそれは同じことであった。

第二章 薩軍征討令に伴う変化

第一節 「鎮撫」の削除

さて鹿児島島の動静に関する情報の少なさを嘆いていた新聞各紙は、二月二〇日、鹿児島不平士族への征討命令という一大ニュースを報じることとなった。ついに西南戦争の開始である。

沼尻と吟光の二人にとっては、再び速報性の高い錦絵を発行する絶好の機会が巡ってきたのだが、彼らの反応は

史苑（第七七巻第一号）

少々遅れた。どうやら、この時すでに三作目の『鎮撫鹿児島新聞』【図3】制作に取りかかかっており、そちらの発行を優先したようである。この錦絵の発行届が内務省に出されたのは二月二二日だが、内容を見ていくと、明らかに一九日以前の情報に基づいて描かれている。

桜島の対岸に「桐野某」「篠原新之助」「村田某」「淵邊某」ら士族たちが結集して武器を構えており、手前では騎馬の「空白」西郷隆盛公が同じく騎馬の「鎮撫 島津久光公」「植原氏」を案内して、急ぎ士族たちのもとへ向かっている。海の向こうには「軍艦兵」を乗せた船の姿も見える。西郷と島津久光が士族らの挙動を憂慮していたという報道は、一二日付『東日』や『仮名読新聞』等に散見されるが、彼らがそろってその「鎮撫」にあたったという部分は沼尻・吟光の創作である。

【図3】詞書

西海も穏ならぬ荒浪に／暴風起る鹿児島島の海／陸より官軍勢攻来らんと／教艘の軍艦鎮台兵繰／込む手配頻りに周る鎮撫の／両将説諭を一際憤發して／朝に報する國事の盡力／議論に説破ハ黨士の煽動／煙りの中に鎮撫の放聲／激に防きの一口（白／向）ハ凱歌に至る／治世とならんや

編輯 大田錦誌

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

【図3】は発行から二カ月あまり後の四月一二日に、内務省から販売差止め処分を受けた。生住昌大氏は錦絵検閲の検討を行う上でこの絵を取り上げており、征討令が下された時点で賊魁となっていた西郷を「西郷隆盛公」とする画中の尊称、



図3 『鎮撫鹿兒島新聞』（土佐山内家宝物資料館所蔵）

および西郷らの行動を「朝に報ずる国事の尽力」とする詞書の表現に問題があったと推測している。しかし、生住氏はひとつ重要な点を見落としている。それは「西郷隆盛公」という表記の上の不自然な空白である。

隣の「鎮撫 島津久光公」の文字との位置関係や、詞書の「鎮撫の両将」という文言か

ら、版下の段階ではこの部分に「鎮撫」という言葉が入っていたものと考えるのが自然である。ここが文字のない空白になっているのは何故だろうか。沼尻・吟光が【図3】の制作にとりかかっている間に、新聞では征討令発令が報じられており、届出の日付からも征討令の報道を目にしていたことは間違いない。つまり「鎮撫」の文字は、この報道に即応して削られたのである。【表1】から分かるように沼尻はこの時期『鹿兒島新聞』という「実録」の執筆にもあたっており、吟光とともに一から新しい錦絵を作る余裕がなかったために、刊行予定だった絵を部分的に改変することに対応しようとしたのだろう。西南戦争期の錦絵検閲においてどのような方法が採られたのか、また何が問題



図4（図3の一部を拡大）

とされたのかは未だほとんど明らかになっていないが、版下段階で存在した「鎮撫」の文字が発禁処分の対象となった可能性もある。

第二節 征討令以降の変化

画面の西郷から「鎮撫」の文字を削除した三作目に続き、彼らの四作目となる錦絵『鹿児島新聞』【図5】が続いて刊行されるが、ここで初めて表題からも「鎮撫」の語が消える。画面左下、落款の横には「明治十年二月一日」の御届印が捺されているが、詞書の末尾には「明治十年第三月」と表記されており、「反跡顕然たる」など詞書に征討令本文の引用が見られることから考えても、これは三月一日の誤りであろう。

右図から中央図にかけ、「鹿児島城」と海を見晴らす山上のような場所に、「桐野利秋」「永山矢一朗」「西郷隆盛」「町田啓次郎」「村田新八」「篠原国幹」ら薩軍の主要人物たちが集合しており、左奥には「官軍方」の乗った軍艦が見える。これまで「鎮撫」の立場だった西郷は【図5】ではじめて士族たちの首領として中央に座っており、詞書でも「鹿児島島の逆将」「昨日執政今日の國賊」「逆徒の魁」と、これまでとはまったく逆の評価に転じている。詞書の五七行目には「桐野篠原等」が「西郷隆盛」に（「暴挙」を）依頼したとあり、一二行目の「魁首三傑」はこの三人のことを指すと思われる。画面では西郷・桐野と並び篠原ではなく町田が陣羽織を着て床机に座っており、些末なことだがこの部分にのみ詞書と絵のずれが指摘できる。

史苑（第七七巻第一号）



図5 『鹿児島新聞』（土佐山内家宝物資料館所蔵）

また、詞書はこの事件を「天慶の乱」に例えているが、沼尻は四日後の三月五日に届け出た『探誠夢復路 鹿児島事件の巻』（澤久次郎版）一卷の冒頭においても、この反乱を「天慶の乱に将門純友の叛逆を誅するに髣髴たる西国の逆徒」と表現しており、その首領である西郷を平将門・藤原純友のイメーヂと重ね合わせている。実は田原坂の戦いにおける薩軍の桐野利秋と官軍の野津鎮雄少将の一騎討ちを、川中島の信玄・謙信

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

の一騎討ちのイメージに重ねて描かれた錦絵が複数存在する⁽²⁰⁾など、この戦争を過去の軍記物語の枠組みに則って描くことは「西南戦争錦絵」全体に共通する性格であった。しかしこうした事実をもって、安易に沼尻や吟光ら錦絵制作者側の想像力の限界とすることはできない。錦絵の最大の消費地である東京や大阪といった大都市は、九州で起きている戦闘によって直接被害を受けることはなく、住民にとって今回の戦争は、遠い場所から余裕を持って眺めることの出来る戦争であった。もちろん成立して間もない明治政府がこの反乱を無事に鎮圧できるとは限らず、陸軍大将西郷の率いる薩軍が政府軍を圧倒する事態を想定した人々は多かつただろう。しかし鳥羽伏見の戦いに始まり江戸総攻撃の危機などがあった一〇年前の戊辰戦争ほど、状況が切迫していた訳ではなかった。西南戦争錦絵の製作者らは消費者のこうした状況を鑑みて、「報道」を下敷きにしつつ「物語」としての西南戦争を描く方向に戦略を転換したと筆者は考える。そしてその契機となったのは、私学校党の蜂起に西郷隆盛が加わっていることを明らかにした、薩軍征討令だったと推測できるのである。

【図4】詞書

異變 西海に起り一信の電／報 忽 三千餘万の耳底を
驚か／せり 抑鹿兒島の暴挙日に／増し 煽動なせしハ

すなわちてんしけい／らん 髻鬃たり況や亦桐／野篠原等ハ
則 天慶の／乱に髻鬃たり況や亦桐／野篠原等ハ
西郷隆盛に／依頼せり然るに鹿兒島の／逆將反跡
顕然たるに因て／征討の命を發せられ屢／官軍の
兵隊と激戦なせしハ昨日執政今日の國賊／たり
魁首三傑も暴兵の大／軍を引率し縣の界に暴／行せ
しとハ實に逆賊の魁と／いわんや

明治十年第三月／大田錦編輯

第三章 「西南戦争錦絵」ブーム

第一節 戦報錦絵から「実録」へ

薩軍征討令を契機に多くの絵師・記者が「西南戦争錦絵」市場に参入し、西郷を始めとした薩軍の将らの活躍を描くようになる一方で、西郷に期待していた「鎮撫」の語が消えた後の『鹿兒嶋新聞』は、画面に大量の薩軍兵士を配し、砲煙に覆われた戦場を描く戦報錦絵となり、【図3】までに見られたような彼らの獨創性は薄れてしまう。例として熊本城での戦いを描いた【図6】を挙げる。

「西南戦争錦絵」全体の傾向としては、熊本城攻防戦や田原坂の戦いで戦況報道が賑わう三〜四月にかけて一気に制作数が増え内容も多様化し、「西南戦争錦絵」ブームと呼べるような事態となるが、薩軍の敗北と転戦が続く五〜

七月に入ると流行がやや沈静化する。錦絵制作数の推移を示した表を文末に掲載した(表2)表



図6 『鹿児嶋新聞 熊本城戦争図』(土佐山内家宝物資料館所蔵)

3)。これは筆者が調査で見出した錦絵、及び図録やデータベースで絵柄が確認できる錦絵を、描き方によって一〇項目に分け、その制作数の时期的変化を追おうとしたものである。ここで言う制作数とは重複を除いた絵柄の数のことであり、それぞれの実際の発行部数に関しては推測が困難であるため検討対象としていない。項目の立て方などには今後の

修正が必要であるが、例えば三枚続の錦絵の合計は、三〇四月には一カ月に五〇点あまりが作られたのに比べ、五〇七月にかけてはその半分以下にとどまっていることが【表2】【表3】から見て取れる。また土屋礼子氏が西南戦争ものの「実録」(土屋氏は「ニュース冊子」と名付けている)を届出の日付順に並べた「西南戦争関係冊子一覧」を参照すると、二月に一二点、三月に一六点、四月に八点が制作されているのに比べ、五月は四点、六月は五点、七月は三点にとどまっている。戦局の変化に伴う制作数の減少は、「実録」にも共通していたことが分かる。

このような傾向は、沼尻・吟光の『鹿児嶋新聞』においても例外ではなかった。三月に五点、四月に六点と発行されてきたものが五月には三点、六月に入ると作られなくなる。しかし作品の制作そのものから退いたわけではなく、【表1】に示したように、四月以降は「実録」である『西南太平洋記』について、あらかじめまとまった巻数の発行届を出し、ほぼ週刊のペースで出版を行っていることから、こちらが制作活動の主軸となったことが見てとれる。沼尻はこれ以前にも西南戦争ものの「実録」として『探誠夢復路 鹿児島事件ノ巻』、『鹿児嶋新聞』初号〜五号を執筆しているが、そのいずれからも手を引き、吟光と手掛けるこの『西南太平洋記』に本腰を据えたようである(表1)参照。

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

本稿では紙幅の都合上内容の詳細な紹介はできないが、每号上巻の巻頭に見開きで多色刷りの挿絵を三図載せ、本編には三〜四頁ごとに白黒の挿絵を一図挿入し、文章には全て振り仮名をふつっている。四月中に出版された四編上下巻までは全ての挿絵に「銀光画」の落款があり、奥付に記載された沼尻の住所は、三編から最終巻の一五編下巻まで一貫して「東京堀江町二丁目二番地 安達平七止宿 茨城県平民 沼尻絰一郎」となっている。この時期、沼尻は東京の吟光宅に住み込んでこの「実録」の執筆にあたっていた。『西南太平記』初篇には序文において次のように沼尻の意気込みが語られるが（『史料1』）、これは『探誠夢復路』鹿兒嶋記聞』には見られなかった傾向である。

【史料1】

夫れ何ぞや、維新の際に方て生命を投じて貴重せし大義名分の何にか有るや。余も曾て楠氏にして足利氏に交ずる者を聞かず。近くハ亦た佐賀熊本萩を以て、誰か殷艦となす。諸変に同じきも一歩を進んで其心事を論及せば、鹿兒嶋県下の兇徒既に政府に抵抗する所以の口実を聞くに、或ハ征韓を主張し、或ハ神威の衰微を慨歎すると唱ひ揚言せしむ。西南の紛起を杜絶するに至らしむる異変を確報探知する事能はず。因て街説を窺ひ、其辺の事迹を記す。看官

我輩が誤脱を咎め、幸ひに投書あらバ、忽ち改正すべくなん。 大芟錦 誌

これまでの錦絵『鹿兒嶋新聞』と比較すると、文章量は飛躍的に増えたのに対し挿絵は簡素なもので、視覚表現の役割は大きく後退した。それは同時に、第一章第二節で示したような錦絵の速報性より、文章による情報量が重視されるようになったことを示す。つまり沼尻と吟光は、戦地から新聞を介して次々に舞い込む最新の報道を「見る」メディアとして消費者に提供する戦報錦絵から、次第に世間の西南戦争ブームが落ち着いていくのを察知し、ある程度まとまった情報をじっくりと「読む」メディアとして、「実録」に活動の重点を移していったのである。

第二節 その後の沼尻・吟光

『西南太平記』は六月一五日御届、八月七日出版の一五編上巻・下巻で完結となるが、沼尻は同じ版元である萬笈閣（江嶋喜兵衛）から、続編にあたる『西南鎮静記』全三編（いずれも八月三一日御届）を発行することとなる。次の【史料2】はその初号に掲載された序文である（句読点、傍線は筆者による）。

【史料2】

西南太平記ト題号スルノ小冊ハ沼尻絰一郎ノ編輯ニ

シテ、現今殆ト十五号全部三十卷ニ至テ満ニス。時ニ該地ノ鼎沸未タ全ク鎮靜ニ至ラス、僕去月汽船ニ乗シテ崎陽ニ着シ、普ク戦地ヲ探偵シテ実況及ヒ義漢節婦ノ小傳ヲ得テ、是ヲ演舌ノ種トス。爰ニ同氏、西南鎮靜記ヲ編ノ際ニ僕ニ校合セヨト云、再三固辭スルト雖同氏曾テ不許。仍テ見聞ノ俣ヲ校訂ス。若シ謬説誤聞モ有ラハ、諸彦能ク僕ガ杜撰ヲユルセ。

明治十年九月 松林伯圓事 若林義行

この文章を記した講釈師二代目松林伯円は、明治初年に新聞記事を元にした新聞講談を開始して「新聞伯円」の異名をとった人物で、佐賀の乱勃発の折には『佐賀伝法録』と題した演目で当たりを取るなど、戦況報道にも慣れ親しんでいた。西南戦争時には、同様の演目で一夜に一五〇〇人という寄席開闢以来の大入りを記録したという。²⁵⁾【史料1】によれば作者である沼尻は、汽船で長崎に向かい「普ク戦地ヲ探偵」したという伯円に、文章の校合を強く依頼しており（文中の傍線部）、前作『西南太平記』よりもさらに記事の精度向上を図っていると言える。正確性を重視しすぎたためか制作の速度は非常に遅く、五く六月の出来事について述べた初篇上下巻が発行されたのは九月二〇日²⁶⁾で、その四日後に西南戦争は鹿児島において終結している。それにも関わらず二編が発行されるのは十一月、三編に至

っては翌年の一月に発行されるものの、内容は七月二日の戦闘を描いて終わっている。巻末には四編の発行が予告されているが、現段階ではいずれの所蔵館においても確認できていない。この発刊ペースの遅さは、果たして記事の精度へのこだわりのみによるものだろうか。

実は『西南太平記』の発行時と異なり、『西南鎮靜記』の制作が開始された八く一〇月という時期には、再び「西南戦争錦絵」ブームと呼べる現象が起きていた（表2）【表3】（参照）。背景には西郷の解軍宣言、佐土原隊や高鍋隊など党薩諸隊の降伏、薩軍の鹿児島帰還、そして九月二四日の城山総攻撃による戦争終結など、新聞紙面を賑わせた戦局の劇的な変化がある。八月三〇日付『読売新聞』に版元江嶋喜兵衛が寄せた『西南鎮靜記』広告文は以下のように述べている（句読点、傍線は筆者による）。

【史料3】

西南太平記 初篇より至十五篇に／全部 出版

沼尻絰一郎編輯

西南鎮靜記 初篇より出版

右西南太平記の儀諸君の愛観を得て發賣する所今般十五篇刻成全尾せり。然るに西南の動擾全く鎮定に至らず、反賊鹿児島を逃れ日隅地へ潰走の顛末、最早鎮靜に及ばんとす。誠に此際に當て中絶致すハ遺

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

憾の趣き御得意方より御尋問間、拙舗に於て至極の儀と存、速に筆者に乞ひ西南鎮静記と題し、前篇に次き初篇ハ来る廿日にハ出版すべし。愛歡の諸彦御購求有らん事を希ふ

東京本石町 書林 江島喜兵衛

西南戦争がまさに鎮静に向かいつつある中で、「『西南太平記』が」此際に當て中絶致すハ遺憾」という「御得意様方」の要望があり、江嶋が「速に筆者「沼尻」に乞うたことよって『西南鎮静記』制作は決まったのだという。つまりこの続編は、顧客や版元の強い意向によつて作られたのであり、『鹿児島新聞』や『西南太平記』までに見られたような、沼尻自身の意向はあまり感じられない。制作の遅れの背景には、肝心の沼尻自身が執筆の熱を失つたという事情があるのではないかと筆者は考える。

また、この『西南鎮静記』には特筆すべき点がもう一つある。前作で作画を担当していた吟光の名が、挿絵の中に全くないのである。同書の奥付に記された沼尻の居所は「東京堀江町九番／櫻井浪次郎同居」となっており、『西南太平記』を最後に、沼尻と吟光の同居生活も解消されていることが分かる。『西南太平記』後の吟光は、九月七日御届の『暴徒日向路引退図』【図7】に落款があるのみだが、この絵は明らかに同じ版元から一月に刊行された『会津

戦争記聞』【図8】の標題と背景を差し替えたものである。版木を所有する版元林吉蔵によつて編集された可能性が非常に高く、吟光自身の活動とは言い難い。林吉蔵も江嶋喜兵衛と同じく、再び起きた「西南戦争錦絵」の流行を察知し、版元としてこの商機に乗り遅れまいとしたものである。しかし肝心の沼尻桂一郎はどういう訳かすでに当初の熱を失つてしまっており、これまで沼尻の依頼を受ける形で錦絵及び挿絵を描いていた吟光も、単独で新たな画題を考え錦絵を描くことはしなかったのである。

その後の沼尻は明治一一（一八七八）年に草双紙『方今五人男 明治奇談』（保永堂版）、明治一三（一八八〇）年に『現今』英名百首（宝文閣版）／版權譲渡を繰り返しながら多数刊行）、明治一五（一八八二）年に旅の評判記『おほたの草鞋』（沼尻桂一郎版）第一号を刊行していることのみ分かっているが、時事報道の世界からは離れるようである。このうち異種百人一首である『現今』英名百首については生住昌大氏の論考「西南戦争もの実録の享受と検閲―沼尻桂一郎作品を例として―」に委しい。また生住氏は同論考の中で、明治二〇（一八八七）年二月に広知社から出版された『通俗絵本 鹿児島軍記』が、沼尻の『西南太平記』『鹿児島鎮静記』を活版に組み直したものであるという重要な指摘を行っている。その後『鹿児島



図7 『暴徒日向路退図』（熊本市立熊本博物館所蔵）

軍記』が出版社を替えながら明治二〇年一〇月、明治二一（一八八八）年四月、明治二四（一八九二）年七月と次々刊行されていったことは、明治二二（一八八九）年の大赦令を契機とする西郷の復権と関連させて検討する必要があるだろう。

また「西南戦争錦絵」においてあまり主体的な活動が見られなかった吟光は、その後憲法発布、壬午事変、日清戦争、義和団事件などにおいて報道画を手掛けており、明治二二年には宮武



図8 『会津戦争記聞』（福島県立博物館所蔵）

外骨の『頓知協会雑誌』によせた絵が原因で不敬罪にも問われている。こうした吟光の画業に、沼尻と共同で『鎮撫（鹿兒島新聞）』や『西南太平記』の制作にあたった数カ月間の経験が生かされたと筆者は考えている。

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

おわりに

ここまで見てきたように記者沼尻桂一郎と絵師安達吟光は、新聞で鹿児島での騒動が報道されるやいなや、各学校生徒らの説論にあたったが諦めて行方をくらました」と伝えられた西郷隆盛の行動における「説論」の部分は大解釈して、勇ましく「鎮撫」にあたる姿を生みだし、西郷が反乱に与していることが報道によって明らかにになると一気に「逆将」に転じさせて描くなど、絵と詞書を巧みに連携させて西南戦争開始前後に速報的な錦絵を発表していた。西郷および西南戦争への世間の注目度の高さを当て込んだ創意工夫だが、彼らはいくまで新聞報道以上の内容は盛り込んでおらず、東京において入手できる限りの情報を一枚の画面上に組み立ててみせた。こうして「西南戦争錦絵」の世界を誰より早く開拓しながらも、その後活動の中心は「実録」に移り、世間の盛り上がりとは対照的に八月以降は主体的な制作活動が見られなくなってしまう。再び訪れた商機に何故彼ら（特に沼尻）は乗じなかったのだろうか。以下、筆者の推論を述べる。

『鎮撫鹿児島新聞』に見た通り、当初から沼尻は西郷隆盛を「鎮撫」の立場に立つ者として描いた。それは消費者が求める光景である以上に、彼自身が西郷に託した期待を

示すものだったのではないだろうか。すなわち沼尻は鹿児島士族たちの不穏な動きを新聞で目にし、前年に相次いで発生した士族反乱と同様あるいはそれ以上の事件になると予測して、これを人々にいち早く報じるため即座に錦絵の出版を届け出た。しかしそれまでの事件と異なるのは、鹿児島には西郷隆盛という大きな影響力を有する人物が隠遁していることであり、沼尻は西郷が明治政府の側に立つて士族たちを説得することを期待して作品を制作した。ところが薩軍征討令によって士族たちが西郷を担ぎ上げたことが判明し、「鎮撫」の語を削除しなければならなくなると、誕生して間もない政府軍がこの反乱を無事に鎮圧できるのかどうか不安が生まれる。薩軍の敗戦が続く西南戦争に対する世間の人々の注目度が下がってくると、今度は活動の主軸を「実録」に移して、その詳細な解説に努めた。しかしいよいよ戦争終結の気配が濃厚になったことで、その熱意は徐々に下がり、ついには「実録」の刊行を中断するに至る。沼尻桂一郎という人物の出自は「平民」と記されているが、西南戦争ものの「実録」に携わった文筆家には武士階級の出身者が多く、彼も旧士族層に近い立場の間であったと仮定すれば、彼が商売感覚だけでなくこの事件を消費者に伝えるという義務感から「西南戦争錦絵」および「実録」出版に携わったとしても、ある程度納得がいく。

この沼尻桂一郎の立ち位置については、筆者の今後の課題である。

本稿で対象とした戦報錦絵の他にも、西南戦争期には人物画や戊辰戦争の子供遊び絵を継承した諷刺画、大阪に特徴的な錦絵新聞の発行など様々な形態の「西南戦争錦絵」が作られ、西南戦争に題をとった芝居や狂言も上演、その劇中人物たちがさらに錦絵に描かれるという広がりを見せていった。それらを検討していく上で、記者や絵師が新聞報道をどのように取捨選択して錦絵を制作するか、また新聞の最新情報を錦絵に取り込むにあたって具体的にどれくらいの期間を要するのかについて明らかにできたことは、筆者にとって大きな一歩であった。

制作という側面と比較してなかなか探りにくいのが、こうした錦絵がどのように消費されたかという享受の側面だが、「西南戦争錦絵」が明治一〇年の東京において果たした役割を考える上では非常に大きな問題である。以下、こちらも仮説段階であるが、現時点での推論を述べる。

「西南戦争錦絵」で最も多い大判三枚統の判型では価格は六銭に統一されており、これは当時の米一升の相場価格とほぼ同じである。錦絵ひとつに米一升分の金額を払える層というのはそう多くないだろう。また詞書には振仮名が振られていないものも多く、漢字交じりの難解な文章を読

解できる層となるとさらに限られてくる。しかし錦絵というメディアはそれを購入した者のみが家に持ち帰って楽しむものではなく、絵草紙屋の店先に吊され、多くの人が集まって感想を言い合いながら眺めて楽しむものである。漢字が読めなくとも、知識のある者が音読してくれる。店先に飾られた「西南戦争錦絵」に人々が集まる様子は、新聞記事やお雇い外国人モースの日記にも散見され、当時はこちらで見られた光景と考えられる。第二章第二節で筆者は、東京市民にとって西南戦争とは直接被害を受けることなく、遠い場所から眺める戦争と述べたが、その戦争を眺める場所として、人々の戦争に対する関心を維持する装置となったのが、絵草紙屋のこうした空間だったのではないだろうか。画面ではかつての藩兵である土族らと、未だ権威を確立しきれていない明治政府の軍隊が戦っており、政府の検閲を通過してはいるものの、それは多かれ少なかれ消費者の願望を汲んで描かれたものである。「西南戦争錦絵」の享受の側面について検討を重ねることで、当時の様々な階層の人々が向けた土族層に対する眼差し、そして維新政权に対する眼差しの一端を、今後明らかにしていきたい。

「演舞」の図録の成立と演舞の発展 (豊後)

表 2-1

形態	内容	1877年												年月日不明 (1877年と推定)
		2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	月日不明	
二枚統	戦報錦絵	13	46	49	15	10	9	25	32	27	10	1	15	16
	人物画		2		1	1		2	1				2	
	地図・番付		3					4	1				1	1
三枚統	過去						2							
	諷刺画		1	1						1				
	役者絵				2						1	1	3	
創作										1	1	2		
三枚統合計		13	52	50	18	11	11	31	35	28	12	5	21	19
戦報錦絵									1					1
人物画														
地図・番付						1								
過去														
諷刺画			2	3			1	2	2					5
役者絵														
創作								3	3					
二枚統合計			2	3		1	1	6	6	5				6
戦報錦絵			1					3	2					1
人物画			7				8	9	6					17
地図・番付							1		1					
過去														
諷刺画			4	2				3	2					
役者絵			3	1					6					
創作														
一枚絵														
一枚絵合計			15	3	9	8	1	15	17		1			20
五枚統・六枚統合計			1	1			1							

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

文献一覽

- 荒野泰典、石井正敏、村井章介編『日本の対外関係7 近代化する日本』（吉川弘文館、二〇一二年）。
- 猪飼隆明『西郷隆盛——西南戦争への道——』（岩波新書、一九九二年）。
- 猪飼隆明「土族反乱と西郷伝説」（松尾正人編『日本の時代史二一 明治維新と文明開化』吉川弘文館、二〇〇四年）。
- 川弘文館、二〇〇八年）。
- 石堂彰彦『近代日本のメディアと階層意識』（吉川弘文館、二〇一二年）。
- 大久保純一『浮世絵出版論 大量生産・消費される（美術）』（吉川弘文館、二〇一三年）。
- 大庭卓也、生住昌大編『久留米大学御井図書館貴重資料企展 西南戦争—報道と、その広がり』（久留米大学文学部、二〇一四年）。
- 生住昌大「土族反乱報道と土族反乱実録—前田健次郎編『絵入新聞西国戦争日誌』の検討—」（『九州史学』一四九、九州史学研究会、二〇〇八年）。
- 生住昌大「明治期実録の研究—土族反乱ものを中心として—」（博士論文、二〇一四年）。
- 生住昌大「西南戦争と錦絵…報道言説の展開と明治一〇年代の出版界」（『日本近代文学』九〇、日本近代文学会、二〇一四年）。
- 生住昌大「西南戦争もの実録の享受と検閲—沼尻桂一郎作品を例として—」（『文学』一六、岩波書店、二〇一五年）。
- 今井昭彦『反政府軍戦没者の慰霊』（御茶の水書房、二〇一三年）。
- 岩崎均史「幕末〜明治の浮世絵事情と新聞錦絵」（木下直之、吉見俊哉編『ニュースの誕生…かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学総合研究博物館、一九九九年）。
- 小川原正道『西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦』（中公新書、二〇〇七年）。
- 小野秀雄『内外新聞史』（日本新聞協会、一九六一年）。
- 木下直之、吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』、東京大学総合研究博物館、一九九九年）。
- 小西四郎『錦絵幕末明治の歴史八 西南戦争』（講談社、一九九七年）。
- 佐々木克「西郷隆盛と西郷伝説」（『岩波講座日本通史 近代I』岩波書店、一九九四年）。
- 佐々木亨「西南戦争と草双紙——『鳥追阿松海上新話』の出現をめぐる——」（『近世文芸』六九、一九九九年）。
- 佐々木亨「鹿兒島実記一夕話」と『鳥追阿松海上新話』大倉孫兵衛の戦略」（『国文学研究』一二七、早稲田大学国文学会、一九九九年）。

篠田敏造『明治百話(上)』(岩波文庫、二〇〇五年)。

鈴木俊幸『繪草子屋 江戸の浮世絵ショップ』(平凡社、二〇一〇年)。

園田英弘・濱名篤・廣田照幸著『土族の歴史社会学的研究』(名古屋大学出版会、一九九五年)。

土屋礼子「明治初期小新聞にみる投書とコミュニケーション」、『新聞学評論』四一、日本マス・コミュニケーション学会、一九九二年)。

土屋礼子「ニュース・メディアとしての錦絵新聞」、『マス・コミュニケーション研究』四六、日本マス・コミュニケーション学会、一九九五年)。

土屋礼子「錦絵新聞とは何か(木下直之、吉見俊哉編)『ニュースの誕生』かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学総合研究博物館、一九九九年)。

土屋礼子「明治初期のニュース冊子にみる絵と報道」、『ことばと社会』(四) メディアと多言語』三元社、二〇〇〇年)。

土屋礼子編『日本錦絵新聞集成』(文生書院、二〇〇〇年)。
土屋礼子『大衆紙の源流 明治期小新聞の研究』(世界思想社、二〇〇二年)。

富澤達三『錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版』(文生書院、二〇〇四年)。

奈倉哲三『諷刺眼維新変革』(校倉書房、二〇〇四年)。
日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典』(大修館書店、

一九八二年)。

牧原憲夫『明治七年の大論争 建白書から見た近代国家と民衆』(日本経済評論社、一九九〇年)。

松井英男『浮世絵の見方 芸術性・資料性を正しく理解する』(誠文堂新光社、二〇一二年)。

南和男『幕末江戸の文化 浮世絵と風刺画』(塙書房、一九九八年)。

南和男『幕末維新の風刺画』(吉川弘文館、一九九九年)。
山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、一九八一年)。

林原純生『西南戦争の戦後史一面―「かなよみ」と「有喜世新聞」の対立、そして「西南雲晴朝東風」―』(『日本文学』(五六) 日本文学協会、二〇〇七年)。

渡辺保『明治演劇史』(講談社、二〇一二年)。

註

(1) 錦絵版『東日』『郵便報知』に代表されるように、錦絵新聞は大判一枚が基本形であった。しかし、台湾出兵や土族反乱などの戦乱を伝える際には、三枚統の形態で出されることが多かった。

(2) 三月二十九日付『朝野』、六月一八日付『郵便報知』などに記事が見られる。

「鎮撫」する西郷像から見る西南戦争錦絵（高橋）

- (3) 明治大学博物館、東京大学明治新聞雑誌文庫、鹿児島大学附属図書館、鹿児島市立美術館、鹿児島県立図書館、熊本市立熊本博物館、土佐山内家宝物資料館、高知市民図書館（コレクションの一部は高知市立自由民権記念館に寄託、調査済）、広島海の見える杜美術館。この内明治大学博物館、東京大学明治新聞雑誌文庫には「西南戦争錦絵」という独立したコレクションは存在せず、所蔵品の中から筆者が「西南戦争錦絵」に類すると判断したものを選出している。また広島海の見える杜美術館のコレクションについては、画像データ化されているものを借りる形で調査を行った。
- (4) 小西四郎『錦絵幕末明治の歴史8 西南戦争』（講談社、一九九七年）、佐々木克「西郷隆盛と西郷伝説」（『岩波講座日本通史 近代Ⅰ』岩波書店、一九九四年）、坂井新二「西郷伝説の再考察」（『学習院史学』三三、学習院大学史学会、一九九五年）。
- (5) 土屋礼子「明治初期のニュース冊子にみる絵と報道」（『ことばと社会（四）メディアと多言語』三元社、二〇〇〇年）。またメディアとしての錦絵新聞や小新聞に注目し、「明治初期小新聞にみる投書とコミュニケーション」（『新聞学評論』四一、日本マス・コミュニケーション学会、一九九二年）、「ニュース・メディアとしての錦絵新聞」（『マス・コミュニケーション研究』四六、日本マス・コミュニケーション学会、一九九五年）、「大衆紙の源流 明治期小新聞の研究」（世界思想社、二〇〇二年）などの著作がある。
- (6) 「西南戦争と草双紙 — 鳥追阿松海上新話」の出現をめぐって」（『近世文芸』六九、一九九九年）、佐々木亨「鹿児島実記一夕話」と『鳥追阿松海上新話』大倉孫兵衛の戦略」（『国文学研究』一二七、早稲田大学国文学会、一九九九年）など。
- (7) 「士族反乱報道と士族反乱実録—前田健次郎編『絵入新聞 西国戦争日誌』の検討—」（『九州史学』一四九、九州史学研究会、二〇〇八年）など。
- (8) 「西南戦争と錦絵—報道言説の展開と明治一〇年代の出版界—」（『日本近代文学』九〇、日本近代文学会、二〇一四年）など。
- (9) 『鹿児島記聞』奥付による。
- (10) 『西南太平記』『西南鎮静記』奥付による。
- (11) 吉野孝雄「宮武外骨」四三頁、明治二二年に大日本帝国憲法発布をパロディ化した挿絵を描いたことで不敬罪に問われた際、三六歳だったとある。
- (12) これは版元植木林之助と同所であるが、関係性は不明。堀江町時代には煙草屋を営んでいたとする説もある。
- (13) 例外として、詞書のない『鹿児島勇擯』と『暴徒日回路引退図』がある。また『鹿児島新聞』の表題で記者が不明な二点（三月二十七日、四月五日）については、沼尻が書いたものと判断し表1でもそのように整理した。
- (14) 鹿児島市立美術館提供の所蔵品リストで表題のみ確認。額装品のため見学・撮影不可。
- (15) これ以前に二月七日御届の芳年画『島津家英雄擯』（林吉蔵版）があるが、疑問点が多く残るため検討の対象としなかった。
- (16) 大山県令はじめ鹿児島県庁は当初から私学校党に与しており、襲撃される理由はなかった。
- (17) 一月二十九日の夜から二月二日にかけて、私学校生徒らが政

府の火薬庫・弾薬庫を襲撃した事件。

- (18) 二月三日から七日にかけて、大警視川路利良の差し向けた「視察団」が私学校生徒らにより捕縛され、拷問の末メソバのひとり少警視中原尚雄から「西郷暗殺計画」を自供する口供書がとられた事件。私学校党が蜂起する上で格好の口実となった。

(19) 東京府知事の達、丙第九二号による。この時他にも四点の錦絵があわせて処分対象となっている。

- (20) 生住昌大「西南戦争と錦絵…報道言説の展開と明治一〇年代の出版界」(『日本近代文学』九〇、日本近代文学会、二〇一四年)九頁。実際には桐野利秋が田原坂における戦闘に参加していたという記録はない。

(21) 小西四郎『錦絵幕末明治の歴史八 西南戦争』(講談社、一九九七年)、大庭卓也、生住昌大編『久留米大学御井図書館貴重資料企画展 西南戦争—報道と、その広がり』(久留米大学文学部、二〇一四年)、『別冊太陽 月岡芳年 幕末・明治を生きた奇才浮世絵師』(岩切友里子監修、平凡社、二〇一二年)。

- (22) 国立国会図書館デジタルコレクション、東京都立図書館 TOKYOアーカイブ、早稲田大学図書館古典籍総合データベース、早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム、文化デジタルライブラリー、静岡県立中央図書館デジタルライブラリー、大英博物館 Collection Collection search、web サイト「西南戦争錦絵美術館」(<http://seinansensenshokie.jimdo.com/>)、土屋礼子編『日本錦絵新聞集成』(CD-ROM)。

(23) 新聞の戦争報道に基づいて描かれたものを「戦報錦絵」、薩軍・官軍の諸将が人物紹介的に描かれたものを「人物画」、

鹿兒島や熊本の地形および軍隊の配置について名所絵風に描いたもの、および各戦闘を相撲の番付形式で描いたものを合わせて「地図・番付」、戊辰戦争や征韓論など過去の事件における西郷の姿を描いたものを「過去」、西南戦争や西郷隆盛を直接的に、あるいは「判じ物」形式で諷刺したもの、「諷刺画」、西郷らに役者に見立てた役者見立て絵、および西南戦争を題材とした「西南雲晴朝東風」等の芝居

絵を「役者絵」、主に西郷の死後に描かれ、地獄で閻魔大王を相手に大暴れする姿や竜宮城に攻め込む姿を描いたものを「創作」、一枚の紙を三〜八分割などにして戦争や人物が描かれたものを、切り取って遊ぶ用途のものと想定して「おもちゃ絵」、西南戦争の各場面を双六に仕立てたものを「絵双六」、そして、小型の判型で共通のタイトルと号数が掲げられ、明らかに「錦絵新聞」を標榜して制作されたと思われるものを戦報錦絵と区別して「錦絵新聞」と分類した。

- (24) 土屋礼子「明治初期のニュース冊子にみる絵と報道」(『こ」とばと社会』四号、三元社、二〇〇〇年)一一八頁。

(25) 篠田敏造『明治百話(上)』(岩波書店、二〇〇五年)二二一頁。

- (26) 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、一九八一年)六六頁。

(27) 二月一八日付『讀賣新聞』「寄書」欄。

(28) E. S. モース著、石川欣一訳『日本その日その日』(科学知識普及会、一九二五年)三二四頁。

(聖望学園高等学校社会科学科非常勤講師)

Seinan War Nishikie (Woodblock Prints) on the Suppressor
Takamori Saigo: An Analysis of Serial Articles Found in
Kagoshima Shinbun (Kagoshima Newspaper)

TAKAHASHI, Miku

The aim of the present paper is to clarify the production process of woodblock prints and the roles of their craftsmen of each process during the Seinan War period.

After the Seinan War (Satsuma Rebellion) broke out in 1877 the number of production of woodblock prints illustrating the war was growing. It is known to us that there appeared a lot of kinds of such new prints media: portraits of those who were concerned with the Seinan War, satirical arts originating from paintings of children during the Boshin War and newspapers with prints especially issued in Osaka. These new media were called the *Seinan War Nishikie* (i.e woodblock prints produced during the Seinan War) collectively.

Here I would like to show the production process of woodblock prints and the roles of their craftsmen by examining a combination of a writer and a painter: Kaiichiro Numajiri and Ginko Adachi. The combination was one of the first examples who produced newspaper articles based on woodblock prints during the Seinan War period. They changed the representation of Saigo Takamori on their newspaper articles before and after the Order of Subjugation of Satsuma in 1877: Before the Order Saigo was represented as a person to suppress the private students' disturbance on their prints. However, after the Order of Subjugation was issued (and it was known to the public that Saigo led the rebellion), they came to represent him as a leader of rebellion against the Imperial State. This change of the representation of Saigo would make us understand that Numajiri and Adachi obtained the precise information on the Seinan War rapidly by reading the newspaper report by the minute.

As the above-mentioned research I would conclude that the *Seinan War Nishikie* were a new media which reflected a rapid change of the era directly. Broadly speaking, the appearance of the new media could testify social and cultural change of transition from early modern to modern society.